

中国歴史の旅

陳舜臣 **下** 上海から桂林へ

中央ポピュラー ☎262-0050

横浜市立図書館



2011916140

集英社文庫

①
1
10
中国歴史の旅
下

上海から
桂林へ

陳舜臣

集英



9784087486643



1920195003817

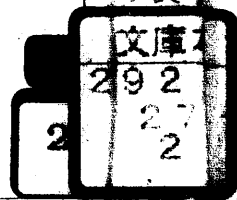
定価400円

本体381円

ISBN4-08-748664-8

C0195 ¥381E

歴史上、つねに要害の地であった南京。水の都蘇州。中国近代史の中心上海。古くから文明が栄えた杭州。洞庭湖をはさむ湖南、湖北。国際貿易港として栄えた福建。山水の町桂林。中国の南の窓広州、バラエティに富んだ文明が重層して独特の文化を築いた中国の全体像を描く、歴史と旅の長篇紀行文。



目次

東

南京 7

蘇州そして揚州 28

上海 50

杭州 71

福建 133

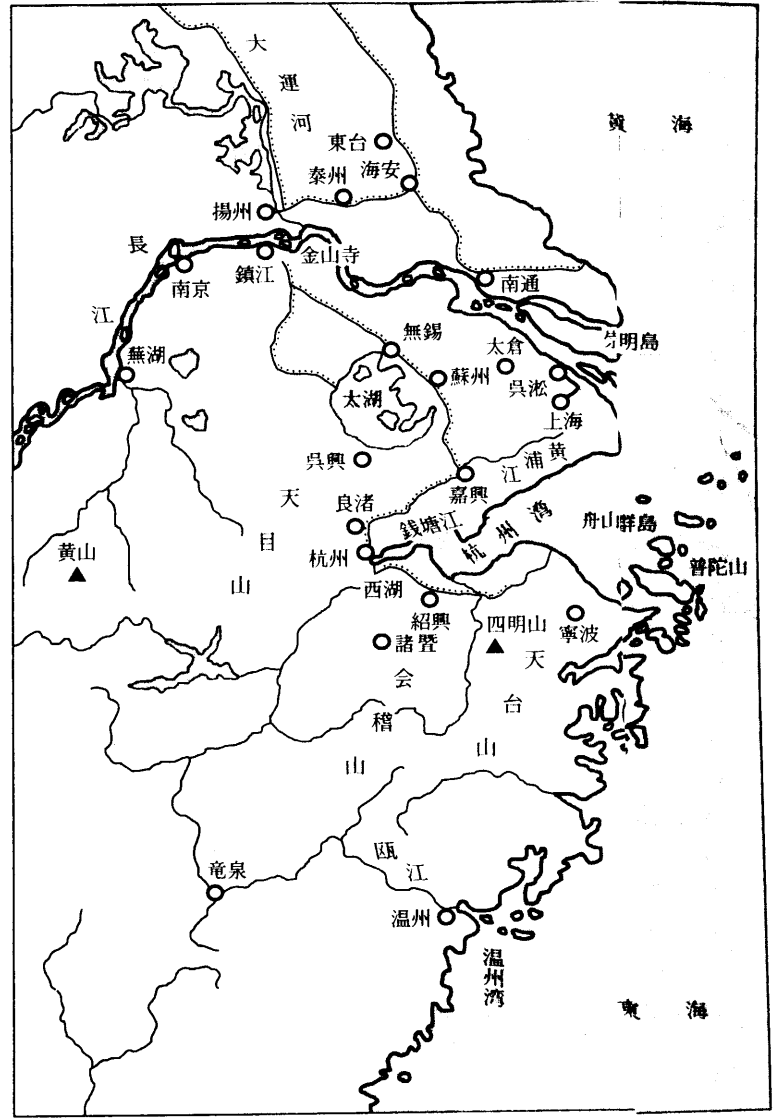
桂林・南寧 153

広州 172

南

江西の山とまち 94

湖南と湖北 112



南京

地理についての知識があまりない人でも、南京ナンキンに来てみれば、
 — ああ、ここは要害ようがいの地だな。
 ということがわかります。

南京
 中国最大の河川の長江（揚子江）が、鄱陽湖ほようこの近くから北東に流れて安徽省を横切
 り、江蘇省こうそにはいつて、ようやく東へカーヴしようとする地点の南東に、南京市が位
 置ちやうしているのです。長江に面している北を除く三方は、丘陵に囲まれているのですか
 ら、しろうとの目にも天然の要害にみえます。むかしから、この地方が重要な拠点と
 なったのはとうぜんでしょう。

春秋時代、ここは呉の領土だったので、紀元前四七三年、呉は越にほろぼされてしまいました。言い伝えによれば、呉をほろぼした越王勾践の上將軍の范蠡が、この地に城を築いたことになっています。

天、勾践を空しうするなかれ
時、范蠡なきにしもあらず

児島高德のこの詩は、戦前の日本の国語教科書にものっていて、勾践も范蠡も日本人にはなじみの深い名前です。

その越も西隣の強国の楚にほろぼされてしまいました。楚の威王（在位紀元前三三九—三二九）の時代といわれています。楚はこの地に「王氣」があるといっているので、黄金を埋めて鎮めたということです。日本ではいまでも、建築などをはじめるとき、「地鎮祭」をおこないますが、似たような風習が中国にもありました。

楚はここを金陵邑と名づけましたが、それは前記の地鎮に由来するといわれています。秦の始皇帝は天下を統一すると、ここを秣陵と改名しました。これから述べますが、この地方はしばしば改名されましたけれども、現在でも、「金陵」ということば

は、南京の別名として使われています。

これまでの歴史では、黄河中流の流域に発達した、いわゆる中原の文明が、しだいに南にひろがったと説明されてきました。三、四世紀（後漢末、三国、魏晉）の動乱で、中原の住民がおおぜい南方に移住したのは事実です。けれども、それ以前の中国南部が、文明の空白地帯であったかという点、そうではありません。考古学的発掘が進むにつれて、南方の古代文明の存在が、しだいにあきらかになってきました。

南京のすぐ近くにも、新石器時代の青蓮崗文化系統の遺跡が発掘されました。中原の仰韶文化や竜山文化と呼ばれるものと、系統は異なりますが、文化であることにはまちがいありません。ただし、現在のところ、遺跡の数は北方にくらべてまばらです。人口はそれほど多くなかったと想像されます。

南京が政治的な一つの中心となったのは、後漢末、三国のころでした。そのころ、この地方の人口も飛躍的に増加したにちがいありません。二〇八年、孫権と劉備の同盟軍は、南下した曹操の大軍を、赤壁で大いに破りました。翌年、同盟を強化する政略によって、孫権の妹と劉備が結婚したのです。さらにその翌年、劉備はみずから孫権を訪問しました。そのころ、孫権は、京口というところを本拠としていたのです。現在の江蘇省鎮江市にあたります。南京の東約七十キロです。

水路で行ったのでしようから、劉備はとうぜん南京を通っています。彼は孫権に、
——この京口より秣陵のほうがいいですよ。
と言ったそうです。

楚の金陵邑を、秦の始皇帝が改名したのは、この地に「王氣」があるのをきらったからです。彼は自分の住む土地以外に、王氣があるのをゆるしません。そこで、この王氣を断つために、つづいている丘陵を切断してしまつたということです。秣は馬を飼うマグサの意味ですが、マグサは切り刻むものなので、そこから秣陵と名づけられたという説があります。

劉備にすすめられなくても、孫権の部下、たとえば張紘といった重臣が、まえまえからここに本拠を置くように進言していたのです。建安十七年（二二二）、孫権はここに石頭城を築き、本拠をうつし、秣陵という名を、こんどは「建業」と改めました。業を建てるというのですから、ずいぶん野心的な命名です。

三国時代には、魏の洛陽、蜀の成都とならんで、呉の建業は天下の三つの中心のなかの一つとなりました。その呉も二八〇年に、魏のあとをついだ晋に併呑されたのです。晋も政治が腐敗し、北方民族の進出があり、三一六年にほろびてしまいます。

晋の皇族で琅邪王であった司馬睿がこの建業に政権を建てたのが翌三二七年のこと

でした。洛陽を首都としていた時代を西晋、建業に移つてからを東晋と呼んでいます。西晋最後の皇帝の名が司馬懿でした。むかしは皇帝の名と同字あるいはほとんど同字の名は、人名はもとより地名でも改めるという風習があつたのです。そんなわけで、建業もそれ以来、「建康」と改められました。

西晋の滅亡後、中国は南北分裂時代にはいります。北方は北方民族系の政権が十六も併立したり交替し、南方は六つの政権が交替しました。ですから、六朝時代とも呼びます。六朝は孫権の呉からかぞえます。

呉、東晋、宋、齊、梁、陳。

このうち、百年つづいたのは東晋だけでした。呉と宋と梁は五十余年、齊は二十二年、陳は三十二年という短命王朝だったので。けれども、この六つの王朝は、いづれも現在の南京市にあたる建業（改名して建康）を首都としました。

11 南 京
王朝がかわれば、人心一新のために、首都を移したくなるものですが、なんども機会があつたのに遷都しなかつたのは、ここが地形的にいかにすぐれていたかを物語ることにほかなりません。

隋が陳を滅ぼして、南北を統一するまで、約三百七十年のあいだ、南京はそこに興起する王朝と、その滅亡を六たびも見ていたのです。短命だったことからわかりませんが、どの王朝にも勇ましい場面がすくなく、文弱というイメージが濃厚でした。

隋から唐にかけて、首都は長安に移され、北宋の首都は汴京（開封市）、南宋は臨安（杭州市）、そして元は大都（北京）でした。明の太祖朱元璋が元をほろぼして、首都を南京に定めたのは一三六八年のことです。南京は陳の滅亡後、約七百八十年ぶりに首都になりました。

そのあいだ、詩人たちは南京を旧都として、懐古の地とみていたのです。晩唐の詩人杜牧（八〇三―八五三）の「江南春」と題する詩は、南京をよんだもののなかで、最も有名です。

千里 鶯啼いて緑紅に映ず

水村山郭 酒旗の風

南朝四百八十寺

多少の楼台 煙雨の中

ここによまれているとおり、六朝時代は仏教が中国にひろがった時期にあたっています。とくに末期を除いて、めずらしく戦争のすくなかった梁の武帝時代（在位五〇二―五四九）は、仏教の全盛期でした。杜牧は四百八十寺とよんでいます。じつさには最も多いときで七百寺を越したといわれています。

これも言い伝えにすぎませんが、日本では子供でも知っている達磨大師は、この時代にインドから中国に来て、梁の武帝に会ったといわれています。武帝は建立した寺院の数を自慢そうに言ったところ、達磨大師は、「つまらないことだ」と言って立ち去ったという話もつくられました。

五世紀には、日本の使節がなんどもこの南京に来たはずですが、『宋書』には、倭王の讚、珍、済、興、武といった名の人物が、国書を送ってきたことが記録されています。讚については仁徳天皇説、武については雄略天皇説が有力なようです。またそれは近畿の河内や大和の王朝の王ではなく、九州で倭王を自称していた地方首長であったろうとする説もあります。

13 南京 達磨さんの言う「つまらないこと」ばかりしていたせいなのか、梁の武帝の末期に国は乱れ、侯景という者の反乱によって、南京は徹底的に破壊されてしまいました。梁がほろびて、つぎの陳王朝は、荒廃した首都の再建が精一杯で、ようやく国力を回復し

たころには、巨大な隋の勢力の南下があり、それを防ぎきることができませんでした。元末の群雄のなかで勝ち残った朱元璋は、北伐して元王朝をたおし、明王朝をたて、久しぶりに南京が首都となりました。じつは、「南京」という地名は明になってはじめて命名されたのです。正式の地名は「応天府」でした。

朱元璋をはじめ、北宋の首都の開封を副首都にしようとおもったのか、そこを北京と名づけ、正首都の応天府をそれにならして南京とも称したのです。

現在の北京は、明初、北平府と改名され、朱元璋は第四子の朱棣を燕王として、この地に封じたのです。朱元璋が死んだとき、皇太子は先に死んでいたもので、皇太孫の朱允炆が即位しました。これが建文帝です。ところが、燕王は兵をおこして、甥にあたる建文帝を攻めほろぼし、みずから帝位につきました。これが永楽帝です。

永楽十九年（一四二二）、永楽帝は自分の古巢である北京へ遷都し、それまで首都であった応天府を南京と改称しました。この地が正式に南京と呼ばれたのは、このときにはじまります。

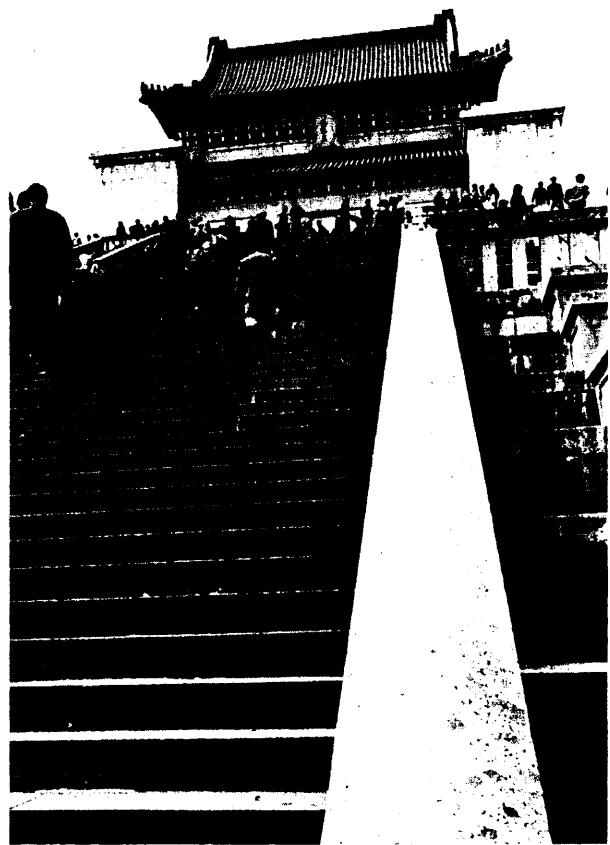
ともあれ明の初期、南京が国都となったのも、僅か五十余年にすぎませんでした。

現在、南京のどこどこに残っている城壁は、明代に築かれたものです。

東の紫金山、南の雨花台、西の清涼山が南京を囲み、北の長江をあわせて、そこを要害の地としています。

紫金山は一名を鍾山ともいいます。標高四百六十六メートルで、西洋の城のように、山中に立っている天文台には、歴史的な観象儀器も保存されていて、博物館を兼ねたかんじです。六朝時代、貴族たちはこの山に庵を結び、またおびただしい寺院が建てられました。五世紀の文人雷次宗の招隱館はとくに有名でした。千数百年を経て、もはや紫金山には六朝時代の面影をとどめるものがないのはいうまでもありません。五世紀に日本から来た使節団はおそらくこの山に招かれ、南朝のみやこをながめたことでしょう。南京を俯瞰するには、この紫金山が最も適しています。

紫金山麓には、かずかずの歴史遺跡がありますが、なかでも最も重要なのは中山陵です。孫文は一九二五年三月十二日、北京において逝去しましたが、その遺骸は四年後にこの地に迎えられたのです。清朝の帝政を打倒し、中国の近代革命の幕をひらいた孫文の事績は、ここに説明するまでもないでしょう。中山陵ぜんたいは、中国の伝統的な様式に、新しい洋風の要素もとり入れたかんじです。ここを訪れた人たちは、長い石の階段をのぼりながら、多難だった革命家孫文の一生を回顧するでしょう。



革命家孫文を祀る中山陵

おなじ紫金山麓の陵でも、中山陵と対照的なのが、明王朝の創始者太祖朱元璋を葬った孝陵こうりょうです。朱元璋は社会の最下層から身をおこし、造反組織のなかにはいり、その組織内で頭角をあらわし、ついには皇帝にまでなった人物でした。しかし、前述しましたように、三代皇帝の成祖永楽帝が北京へ遷都し、それ以後の皇帝の陵墓はすべて北京近郊にあります。「明の十三陵」として知られていることはいうまでもありません。二代目の建文帝は三代目の永楽帝にほろぼされ、明代では正統皇帝と認められず、また戦乱のあと遺骸も発見されず、陵墓もつくられませんでした。したがって、南京にある明の皇帝陵はこの孝陵ただ一つです。

明の孝陵には、かつては宏壮こうそうな殿楼が建っていたのですが、十九世紀半ばの太平天国戦争のときに破壊され、いまは参道に六將軍、四文官の石人のほか、馬、獅子、駱駝だ、獅、象、麒麟の六対の石獣が置かれているだけです。北京近郊の明の十三陵にくらべると、こちらは一陵だけということもありますが、やはりだいぶさびしいかんじがします。

陵ばかりではありません。洪武六年（一三七三）に竣工しゅんこうしたといわれる明の故宮も、たびたびの兵火で失われました。竣工して僅か三十年後に、建文帝はみずから宮殿に火を放っています。南京は長安や北京のように平地につくられた首都ではなく、複雑

な地形をしていますので、碁盤の目のように規則正しい都市計画ではありませんでした。そのため、皇居に相当する故宮（紫金城）も城内の東南隅に寄っています。東郊から東門にあたる中山門（明代には朝陽門と呼ばれていました）をはいつたところが、明の故宮のあったところですが、これも往時をしのぶよすがはほとんどありません。なお朝陽門が中山門と改名されたのは、そこから中山陵に通じているからです。

中山陵の東南に、靈谷寺という寺があります。梁の武帝が建立した、おびただしい寺の一つで、はじめは開善寺と呼ばれていたのが、明代に靈谷寺と改められたのです。もちろん兵乱の多かった南京で、城外といえども千数百年前の堂宇が残っているはずはありません。けれども、緑濃い森林に囲まれた境内は、訪問者の旅情を慰めてくれるでしょう。堂宇はほとんどが新しいものですが、無量殿は明代の建築です。そのあたりを散策すると、達磨大師が梁の武帝に言ったことなどが思い出されます。

靈谷寺の近くには、かつて漆園と呼ばれてウルシの木ばかり植えていた一画がありました。明初、日本の海賊——中国でいう倭寇がすでに沿岸地方を略奪していました。それに備えるため、明では多くの兵船を建造したのです。当時のことです。それから、もちろん木造船ですが、防水補強のため船には漆を塗ることになっていました。そのため漆を、ここでまかなったということです。思わぬところに日本との関係がありました。

た。

明の故宮は燕雀湖という湖を埋立て、そのうえにつくられたといえます。江南の地ですから、南京は水にとりまかれています。水のすくない北方なら、湖水を埋立てるような、もったいないことはしなかつたでしょう。

城の東北に、玄武門を出たところに、玄武湖があります。それと対応するように、城の西南に莫愁湖があります。どちらも公園として、市民の憩いの場所として親しまれているのです。

玄武湖はむかし秣陵湖あるいは後湖とも呼ばれていました。六朝時代の宮城は、明の故宮よりもだいぶ西北にあり、玄武湖はその裏手にあたっていたので、後湖と呼ばれていたのでしょう。方位からいえば、高松塚でもおなじみの四神獣は、南が朱雀、東が青竜、西が白虎、北が玄武です。宮城北方の門を玄武門と呼び、そこを出たところにある湖なので、そう名づけられました。

玄武湖にはいくつも中洲があり、いたるところが蓮の葉に覆われ、湖岸には植物園があります。京滬線の鉄道は、玄武湖の北方を走り、南京駅もそこにあるのです。



南京のシンボル南京長江大橋

この線の鉄道は、かつては長江の対岸から連絡船に頼っていたのですが、解放後につくられた南京長江大橋のおかげで、あっという間に列車は長江を越えてしまします。南京から浦鎮^{ぽうちん}まで、鉄道橋と四車線の公路橋の二重の橋になっているのです。鉄道橋のほうは全長六千七百余メートル、公路橋のほうは四千五百メートルあります。

この南京長江大橋は、自力更生のサンプルのような工事だったそうです。はじめは特殊鋼の入手も困難でしたが、技術者、労働者の創意でそれを生産することに成功し、みごとに竣工しました。いまこの大橋は、南京の新しいシンボルとなつたようです。

莫愁湖は、六朝の斉のころ、盧^ろ莫愁^{ぼくしゆう}という佳人が住んでいたところから名づけられた、と言い伝えられています。規模としては、玄武湖よりはひとまわり小さいかんじです。この莫愁湖も玄武湖も、明代の城壁の外にあります。

莫愁湖の北方ですが、城内に小高い丘陵があります。五台山^{ごたいざん}体育场もその一面にあるのですが、清涼山もその一帯です。南京の西の守りにしては、あまり高くない山ですが、たしかにこの山塊のおかげで、南京がぐっとひきまっています。五代のころ(十世紀)、ここに西涼寺という寺が建立されたのが、山名のいわれだということです。それ以前も、このあたりには仏寺がすくなくありませんでした。呉の孫権が築いたといわれる石頭城も、この山に拠^よっていたと推定されています。

現在の南京市の中心は鼓楼でしよう。明の洪武十五年（一三八二）に築かれたもので、かつてはここに置かれた太鼓が、市民に時刻を告げていたのです。

城内に小高い丘陵がすくなくないことも、南京の一つの特徴でしょう。玄武湖を眼下にみる鷄鳴山もその一つです。おなじ丘陵にある北極閣は、元代の觀星台、のちに欽天台と呼ばれた天文台の遺構です。

六朝最後の王朝である陳王朝の最後の皇帝が、こともあろうに隋にほろぼされる直前、三つの樓閣を築いて、長夜の宴にうつつを抜かしたのもこの丘でした。

こんなふうに、南京にはいたるところに歴史がひそんでいます。

明は永楽帝の時代に北京へ遷都しましたが、これまでの首都南京に敬意を表したのか、南京を陪都として、政府機関をそっくり残しました。一六四四年、李自成が北京を陥し、明の最後の皇帝が自殺すると、皇族の一人の福王が、南京に亡命政権をつけたのです。行政府がそのままあったので、受け皿として都合がよかったです。政治は建物や機構ではありません。亡国の危機だというのに、高官要人たちが派閥争いに明け暮れ、南下してきた清軍に抵抗さえできませんでした。福王は城を棄てて逃げ、つかまって殺されるという醜態を演じました。

清代、首都は北京で、南京は江寧府と呼ばれ、両江総督の駐在地となりました。ただし、南京という地名も、一般に用いられていたようです。両江総督には曾國藩、李鴻章、左宗棠など、つねに清朝のトップクラスの人物が任命されました。この地方がいかに重要であるかを物語るものでしょう。

一八四二年八月、イギリス艦隊は長江を溯航し、鎮江も陥ち、南京はもはや風前の灯ということになると、清朝も意気沮喪し、屈辱的な条約を結ばざるをえなくなりしました。これが、アヘン戦争の幕をひいた「南京条約」です。当時の言い方では「江寧条約」ということになります。

香港の割譲、五港開港、実質的な治外法権、アヘン賠償金、軍事費の賠償など、イギリスの一方的要求をすべてのんだのが、この条約で、それから続々と結ばれた不平等条約の第一号でした。

条約の調印は、長江にうかんだイギリス戦艦コーンウォリス号において、八月二十九日になされました。イギリスの全権代表ポッティンジャーが、上陸して儀鳳門外（現在の南京西駅）の静海寺というところで、清国代表の耆英たちと条約のことを話し合ったのは、その三日前のことでした。

軍艦のなかとはいえ、条約に命名するとすれば、「南京条約」というほかないでしょう。不平等条約第一号に、その名をかぶせられた南京は、その不名誉に耐えねばなりませんでした。

こうして、列強の中国侵略がはじまりました。清朝は腐敗し、人民は塗炭の苦しみをなめることになったのです。アヘン戦争のあと、各地に反乱がおこりましたが、それは人民の生きんがための決起でした。

数多い造反軍のなかで、最も大きく、そして最もはつきりした革命理念をもって起ちあがったのが、「太平天国」であったのはいうまでもありません。一八五一年、金田村で挙兵した太平天国軍は、武昌を攻略し、怒濤の勢いで長江を南下しました。

太平天国軍が南京を占領したのは、一八五三年三月十九日のことです。太平天国はここに首都を置き、有名な『天朝田畝制度』を頒布して、建国の理想をあきらかにはしました。国家の元首は天王の洪秀全でした。そして、南京は「天京」と改名されたのです。

太平天国は十一年余にわたって南京を維持しました。江南一帯に兵を進め、各地の拠点を確保しましたが、北伐は失敗に帰りました。曾国藩の湘軍、李鴻章の淮軍、ゴルドンの外人部隊などにはげしく攻められながら、太平天国軍はなんども敵に痛撃を

与えたのです。曾国藩が一度ならず絶望して自殺をはかったことが記録されています。けれども、太平天国の内部にも、さまざまな矛盾がありました。内訌があり、それが太平天国の活力を弱めたのです。

一八六四年になってから、蘇州について杭州を失い、六月一日、天王洪秀全は死に（自殺説もあります）、七月十九日、ついに天京は陥落したのです。

太平天国は紫金山に天保城を築き、南京城の西北に地保城を築き、この両城に拠って死守しようとした。清軍はこれにたいして地下道を掘って城壁を爆破し、攻撃の突破口をつくる作戦をとったのです。天京は包囲され、食糧も尽きたのですが、最後まで死戦して、ついに玉砕しました。この戦闘によって、南京が潰滅的な打撃を受けたのはいうまでもありません。けれども、南京の山河や残った城壁の一つ一つは、太平天国の勇敢な戦いの記念碑にほかなりません。

現在、南京市には天王府の遺跡があります。また太平天国にかんする博物館が設けられています。しかし、革命の烈士の記念はこれだけではないのです。

鼓楼からまっすぐに南下しましょう。中山路から中華路にはいります。中華路の南の中華門をくぐって、さらに南へ行ったところに雨花台があります。

六世紀前半の梁の武帝の時代、雲光法師という僧侶が、この岡で経典を講じていた

とき、天上から花が雨と降ったので、雨花台と名づけられています。この山だけにあ
るきれいな縞しまのはいった石は雨花石と呼ばれて、人びとに珍重されてきました。

雨花台はたしかに風光明媚ふうこうめいびの地です。けれども、中国人は雨花台という地名を耳に
すると、悲痛な感じにうたれるのです。それというのは、国民党政府が南京を首都と
していた時期、ここは政府に反対する愛国的な革命家を処刑する場所だったからにほ
かなりません。おおぜいの若者が、ここで恨みをのんで殺されました。

いまここは「雨花台烈士陵園」と呼ばれています。非命にたおれた烈士の墓前に記
念碑が立てられ、そこには毛沢東の筆で、

——死難烈士万歳

と書かれています。その碑のまえには、供花のたえたときがありません。

陵園内の記念館には、烈士の遺品や写真やその経歴などがならべられています。参
観する人たちは、息をのみ、胸を詰らせながら、重い足どりで歩むのです。

南京は江南のうるわしい山水に富んでいます。古都南京は私たちを六朝のいにしえ、
明の建国などの歴史にひきこみます。歴史は流れて、アヘン戦争の南京条約から太平
天国の悲劇に及びます。そして雨花台に立てば、悲しみの極に達するでしょう。けれ
ども、人びとは南京長江大橋に象徴される、未来への希望に胸をふくらませるはずで

す。


南京は地形も起伏に富み、その歴史も起伏に富んでいます。

多感な旅人は、南京を訪ねると、去りがたいおもいがするでしょう。

(この作品は一九八一年四月、東方書店より刊行された。)

集英社文庫 目録 (日本文学)

檀 太郎	新・檀流クッキング	柘植久慶	零の記号	柘植久慶	傭兵たちの報酬
檀 晴子	檀流クッキング入門日記	柘植久慶	戦場の人間学	柘植久慶	傭兵たちの落日
陳 舜臣	日本人と中国人	柘植久慶	クーデター	柘植久慶	インドシナ急行
陳 舜臣	怒りの菩薩	柘植久慶	傭兵見聞録	柘植久慶	サイバル・ブック
陳 舜臣	青雲の軸	柘植久慶	血の航跡	柘植久慶	ゴールド・ラッシュ
陳 舜臣	紙の道(ペーパーロード)	柘植久慶	地獄の犬	辻 邦生	モンマルトル日記
陳 舜臣	耶律楚材(やりつそきじ)(上)(下)	柘植久慶	赤の殿下誘拐作戦	辻 邦生	モンマルトル日記
陳 舜臣	中国歴史の旅(上)(下)	柘植久慶	炎の軌跡	辻 仁成	ピアニシモ
つかこうへい	現代文学の無視できない10人	柘植久慶	ヒトラーの戦場	辻 仁成	Pianissimo(英語版)
司城志朗	香港パラダイス	柘植久慶	ナポレオンの戦場	辻 仁成	クラウディ
司城志朗	百年経つたら墓の中	柘植久慶	死のフィアンセ	辻 仁成	カイのおもちや箱
柘植久慶	喜望峰の星	柘植久慶	マンハッタンの墓標	辻 仁成	旅人の木
柘植久慶	ザ・グリーンベレー	柘植久慶	チェックメイト・キング	辻 仁成	函館物語
柘植久慶	フランス外人部隊	柘植久慶	獅子たちの時代	辻 仁成	成カラスの天井
柘植久慶	女王の身代金	柘植久慶	闇の足跡	津島佑子	童子の影
柘植久慶	グリーンベレーの挽歌	柘植久慶	傭兵たちの葬送	筒井康隆	馬は土曜に蒼さめる

 集英社文庫

陳舜臣作品

日本人と中国人

怒りの菩薩

中国のルネサンス(編者)

落日の大帝国(編者)

青雲の軸


紙の道(ペーパーロード)

耶律楚材上 草原の夢

耶律楚材下 無絃の曲

中国歴史の旅 上 北京から西域へ

中国歴史の旅 下 上海から桂林へ

 集英社文庫

中国歴史の旅 下 上海から桂林へ

1997年8月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 陳舜臣

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印刷 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

© S.Chin 1997

Printed in Japan

ISBN4-08-748664-8 C0195



ち-1-10